

酪農家の負担軽減のため、農作業を代わりに行う「酪農ヘルパー」。本町でも担い手不足や人手不足の対策として、酪農ヘルパー利用組合が平成3年に発足。日に欠くことができない給餌や保育管理の労役の負担を酪農ヘルパーが軽減している。

雄武町でただ一人、ヘルパーから経営者となった者がいた。現在も青葉で酪農を営んでいる。

なぜ夢は実現したのか、なぜ志したのか。

現代に生きる先駆者の言葉から担い手対策のヒントを探る。

## 酪農ヘルパーから経営者へ

渡辺 潔さん（青葉）

### 酪農ヘルパーから新規就農

平成4年にできた新規就農制度の第一号の利用者が私です。その後、同じような支援を受けた人はいましたが、町外から入って、酪農ヘルパーを経て、新規就農した人はここ20年で一人もいませんね。酪農ヘルパーは平成3年6月から始めましたが、その制度を利用したのも私が初めてでした。農業会議所のグリーンバンクで実習先を探していたのですが、その頃、道内でもヘルパーをやっている箇所は少なく、一度話を聞いてみないか

ということになって雄武町に来ました。

前職は営業職だったので、農業が異業種とは思っていませんでした。農業は自分だけで完結する仕事ではないので、餌屋さんがいなければだめだし、機械の修理屋さんがいなければ成り立たない。あらゆるサービスの提供を受けて農業という産業が成り立っていると考えていました。

実は子どもの頃から農業をやるのが夢で、将来のことを考えて、経営の実現可能性がある北海道での就農を考えていました。

### 新規就農までの経緯

雄武町に来てから最初に、当時ヘルパー組合の代表者だった渡辺和基さん（豊丘）の面接を受けました。渡辺さんは気遣ってくれて、正式にヘルパーとなる前に、一週間実習に入らせてくれました。当時から酪農が問題になっていて、「将来、経営者になれる可能性があるのでもまずヘルパーをしてみないか？」と言われ、「ぜひやらせてほしい」と頭を下げました。それから酪農ヘルパーとして2年半働くことになるのですが、当時は、

農家戸数が130戸くらいあるうち、88戸がヘルパー組合に加盟していた時代でした。その時、前経営者だった後藤さんという方が酪農するという話が畜産農協から入りました。そして、畜産農協が私と後藤さんの間に入り、その場所で新規就農が実現しました。ヘルパーは、乳搾りや農家の手伝いなどを行うのが主だったので、牛の管理などの経験がなく、新しい牛を入れるときに少し不安がありました。後藤さんが牛を入れるのを手伝ってくれ、ここでの農業のやり方も親身になり教えてくれました。そして、興和（現在の青葉）のみんなが温かく迎え入れてくれたのです。

### 新規就農一億円の壁

町はせっかく支援してくれる仕組みがあるし、農協ももっと周りに就農を広めるような工夫をしてほしいと思っています。ですが、酪農はある程度の規模でやるとしたら、新規で一億円くらいの資金が必要となります。すぐにやれるというようなものではない難しさがあると思います。

### 新規就農を広める工夫

なので資金面を抑えながら次世代に酪農を引き継ぐ方法を考えるのも手だてじゃないでしょうか。酪農する人が増えています。でも後継者がいなくなったら、今まで培われてきた農家の歴史がそこで終わってしまいます。既存農家には、土

地や牛、機械がそろっています。何よりも絶やしてはいけない「経験」も詰まっています。だから新しい担い手をたくさん入れて、酪農する前にノウハウを引き継ぐ。その土地を一番よく知っている経営者から直接指導してもらおう。そういった制度が広まれば、新しい担い手の酪農指導にも力を入れることができると思います。また、私は小規模農家をたくさん作ることも大事だと思っています。そうすれば、人口が増えて町も潤う。既存農家に新しい担い手を受け入れていけば、戸数も減少しないで未来に引き継げる。今は町外に就職に出ていく若者も多けれど、この場所で仕事ができることに気付いてほしいです。

### 経営規模の拡大

規模を拡大しても人口は増えない。青葉には土地や畑に余裕があるので、新しい人が何人か来ないのかなってずっと思っています。酪農後に固定資産税がかかるからって牛舎を壊してしまう農家も間近に見てきました。青葉でも後継者がいるところも少なく、それが現実なんです。町の産業が小さくなると、人口もますます減って、若い人がいなくなってしまう。元気な雄武でやっていくためにはもっと、皆で協力してやっていかないといけないのではないのでしょうか。

町の活性化のために行動する人が一人でも増えることが私の願いです。

以前私がそうだったように、農家を引き継ぎたいという意欲のある若者が、これからどんどん増えてほしいと思っています。将来、私が高齢となり自分のところへもし、「酪農がやりたい」という人が訪ねてきたら、「自分の土地だから渡さない」という感じにはしたくなくて、逆に資源を生かしてほしいと考えています。

### 新しい可能性への挑戦

まったく経験がなかった私でも、なんとかやってこれました。農家の後継者じゃなくても、農業はやれるんです。3年から5年、一生懸命やれば絶対自分のものになっていく。そうなれば、自分の好きなように農場を作っていける楽しみがある。だから、特に今の若者には新規就農という新しい可能性に挑戦してほしい。そして、この町を一緒に盛り上げていきたいね。

